

8 マリアナ

「堀をめぐらした村屋敷に潜むマリアナ」

(『尺には尺を』より)

花壇はそこら中  
黒々とした苔で覆われ  
梨の木を切妻壁に止めていた支えの板から  
錆びた釘が抜け落ちている  
崩れた物置小屋はどこか悲しげで 5  
カタカタいう掛け金は はずされた形跡もない  
ひとけ 人気もなく 堀をめぐらした村屋敷の  
ポロポロの茅葺き屋根には草が生えている  
女は独り呟く「虚しい日々よ  
あの方はいらっしゃらない 10  
もうこんなに疲れ果てて  
いっそ死んでしまいたい」

夜露と一緒に涙が落ちる  
かわ 乾く間もなく 涙はしたたり落ちて  
あした 朝も 夕も 15  
美しい空を見上げることもできない  
コウモリが飛んで去って  
深い闇が夜空を眠らせると  
窓辺のカーテンを引き寄せて  
暮れゆく平野に眼を呉れた 20  
女は独り呟く「虚しい夜よ  
あの方はいらっしゃらない  
もうこんなに疲れ果てて  
いっそ死んでしまいたい」

真夜中になって 25  
眠れぬ女は 夜鳥の鳴き声を耳にした  
夜明け一時前には 雄鶏が鳴き  
暗い沼地の方からは

雄牛の低い鳴き声がする  
希望を失った女は 夢現<sup>ゆめうつ</sup>の中を独りさまよう 30  
やがて 冷たい風に灰色の瞳の朝が目覚めて  
堀をめぐらした侘しい屋敷<sup>わび</sup>に朝日を注ぐ  
女は独り呟く「虚しい一日の始まり  
あの方はいらっしゃらない  
もうこんなに疲れ果てて 35  
いっそ死んでしまいたい」

堀のすぐ先の水門には  
黒々とした水が淀んでいて  
丸々と小さな群れをなした沼苔が  
びっしりと覆っている 40  
すぐ側には コブだらけの木肌と銀緑色の葉が生い茂った  
一本のポプラの木が 休みなく風に揺れている  
見渡す限り 他には一本の木も無く  
暮れ滞<sup>なづ</sup>む原野がどこまでも伸びている  
女は独り呟く「虚しい日々よ 45  
あの方はいらっしゃらない  
もうこんなに疲れ果てて  
いっそ死んでしまいたい」

月が低く懸<sup>かか</sup>り  
風がヒューと吹き上がって消え去るとき 50  
白いカーテンが揺れて  
女には ふと人影が見えたかと  
でも 月がいよいよ低く傾く時には  
暴れる風もねぐらに収まり  
ポプラの木陰が 55  
女のベッドに 女の額に落ちかかる  
女は独り呟く「虚しく過ぎ行く夜よ  
あの方はいらっしゃらない  
もうこんなに疲れ果てて  
いっそ死んでしまいたい」 60

想いに耽<sup>ふけ</sup>る屋敷の中で 日がな一日  
扉の蝶番<sup>ちょうつがい</sup>がギーギー軋<sup>きし</sup>み

窓辺では青バエの羽音がし ネズミが  
朽ちかけた羽目板の裏でキーキー鳴いて  
板の割れ目から辺りを覗き見している 65  
懐かしい面々が戸口にチラチラ見え  
懐かしい足音が二階の床に響く  
懐かしい声が外から女を呼んでいる  
女は独り呟く「虚しい日々よ  
あの方はいらっしゃらない 70  
もうこんなに疲れ果てて  
いっそ死んでしまいたい」

屋根に止まったスズメのチュンチュンという鳴き声  
柱時計のゆっくりとしたチクタクと鳴る音  
寄ってくる風の求愛に 75  
冷たく応える ポプラの揺れる音  
それらが 皆して女の意識を混乱させる  
でも 女が一番厭うのは  
差し込む陽の光に部屋の埃が立ち込める時  
そしてやがて 陽が西に傾く時 80  
女は言った「虚しいこの身よ  
あの方にはいらっしゃるお気持ちが無いのだ」  
女は泣いた「もうこんなに疲れ果てて  
ああ神様 死なせてください」

(山中光義訳)